
月 刊

MéLange

vol.85



2013.09.22

詩と評論

月刊

「MéLange」

VOL.85

2013/09/22

月刊

「MéLange」
編集部

三行詩その後……………	野口裕	3
名月菜飯定食……………	岩脇リーベル豊美	4
あけやらぬみずのゆめⅢ……………	福田知子	5
カブトヤマコベニテングアブラムシの逆襲……………	中嶋康雄	6
生が……………	川田あひる	8
方途……………	富哲世	9
紅茶とたとえばゴッホのような画家……………	月村香	10
羊水の海……………	高木富子	10
ツウカ……………	大橋愛由等	11
手を振って……………	上野都	12
返信……………	中堂けいこ	13
亀裂……………	寺岡良信	14
泥のしつぽ……………	高谷和幸	16
中秋の月夜……………	千田草介	17
エッセイ……………	岩脇リーベル豊美	15
△詩人通りより▽8「詩人通りはゲルトルート通り」……………	高谷和幸	18
△神戸詞あしび▽74「夏の陽と影のさなか「一日一句」の日々」……………	大橋愛由等	20

編集部だより★06/二か月ぶりの開催となる第85回「Mélange」読書会発表担当は、近藤久也氏。テーマは、「高田渡と詩について」。近藤氏は案内文にこう書きます。「私は十代の終わり頃から詩のようなものを書き始めたのですが、そのきっかけは書き始める数年前（1970年頃）から高田渡の唄をそれこそレコードがすりきれてしまうほど繰り返し聴いていたからだと思います。当時、人気のあった吉田拓郎やもっとマイナーないわゆるアングラフォークといわれるようなフォークシンガーたちとも唄っている歌詞の内容が全くちがっていると感じました。（曲の感じもですが。）最初は中学生にはとっつきにくく、なんのことも唄っているのかほとんど解りませんでした。しかし繰り返し繰り返し聴いているとなにか不思議な言葉の調子、なにか懐かしいような人の生活臭、世界観、そんなものにひきずりこまれていったのです。（以下略）」と。私もこの高田渡の「自衛隊に入ろう」を育った世代に属します。（大橋記）

◆三行詩その後

野口裕

四 照り返しに偏光多く
ティッシュのふわふわも
装飾の街

八 旋盤の軋りを重ね裁断の刹那に
建築家夢想の果ての結界の渚の
連風の根が海中に没する

一 血が出るほど言葉にこすりつけて
言葉を洗う
髭面がよく似合うよ

五 ついに消滅した一族の木
伐り倒され漉かれ
この葉書のふしぎな数字に電話せよと

九 修練罎えて立つべき舞台消滅
深夜コンビニ店員が響かせる
バーコードリーダーの変身失敗音

二 早朝、暖かな車内で睡眠
同じ頃、別の私が寢床で
同じ夢を見ていた

六 ジグソーパズルの一片が
雨に打たれつつ鳥を待つ
三連電池のロボット鳥を

十 湯気の手が契約と紙を差し出すので
思案に暮れて磁気の史書を手放せば
紐葉はピンと伸びて震える

三 ストープのそばで
まわす扇
上昇気流よ 降りてこい

七 水銀の池に咲く花は
音立えずに開く
流行らなくなった銀河流浪譚

十一 工場街
鳥居
百足

◆名月菜飯定食

岩脇リーベル豊美

大根の葉っぱを引き千切って白い部分だけを買って物籠に入れるから引き千切られ捨てられたほうの緑をわたしはワサワサと受けとめるカリフラワーの硬い葉脈もコールラビの長い茎も思い切り勢いよく投げ出されているのが常である

今夜は

Hokkaido という種名の南瓜の裏漉しスープを前菜に雨上がりの森に顔を出した Reinker というキノコを添えよう
日本語名はインターネットのキノコサイトにも書かれていない
オレンジ色の傘に緑の斑紋状の対照的一部分が禍して
地元の間にも怪しい猛毒きのこと錯覚されているが
生態系においては分解という大切な役割を担っており
わたしのふたたびの生長のために効果をあげてくれる
森の秋雨にとり残されて耀きながらわたしのことを待っているではないか

十六夜一巡の月の遠心力で

猛夏に伸びた髪もごっそり抜け落ちてしまいましたからね

大根の葉っぱは長めに塩茹でしてから刻んで御飯に混ぜて胡麻塩を振って出来上がり
近年これが最上の秋の味覚と思える
冷たくなっておにぎりを握っても
皆知らないだけで意外にも争奪しつつ頬ばる
ひとつくらい残るかもって甘いあまい甘塩調整
この界限のスーパ一の買い物客は

◆あけやらぬみずのゆめ III

福田知子

衝撃からうまれた異常な汐の流れ みるみる近づく水けむり
切れる電源 襲う水 壊れた虚構という名の神殿
その痕跡から現れつづける 穴だらけの魂
北の海にいまも彷徨う 浮遊するいくつもの魂
いくつもの腕 いくつもの脚 いくつもの背中 いくつもの腹 いくつもの頭 いくつもの顔 そして幾片もの骨
夏の終わり 血糊の交じった熱い海を
いくつもの半透明の身体が 行き交う
魂の群れが 浮遊する 陽炎になって ゆらゆらと
もう誰 憚らない 臉には 耐えがたい記憶の裏側を

あがらない腕 あがらない脚 あがらない背中 あがらない腹 あがらない頭 あがらない顔 あがらない骨 そしてあがらない魂
海藻も貝殻も 骨だらけの魚も半透明になって彷徨う
目を覆われ 耳を奪われ いまだ触れない 閃光にさらされる なかいまの夏
海から陸へと ゆれのぼる影たちの死骸を踏んで なおも突き刺す
絡みつく腐った海藻のにおいを消すしぐさにも慣れた かのようにみえる狂気
幾重ものそれら半透明の群れを見放すごとく

海は憶えているだろうか
いくつもの魂を宿しては破壊する
もはや人びとが忘れてしまった
この星の
愛に満ちた憤りの深さを

◆カブトヤママコベニテングアブラムシの逆襲

中嶋 康雄

甲山で、私は幼い頃よくカブトヤマオオハナムグリを採集した。カブトヤマオオハナムグリは、甲山の固有種であることが近年判明したが、すでに絶滅したとされる甲虫の一種である。カブトヤマオオハナムグリの色は、緑の地に、その甲羽のフラクタル構造により、光の反射具合で青がキラキラと変転自在に映えたり映えなかつたり。そういう美しいコガネムシの一種であった。ただ、この美しい虫を不用意に手に取ると、カブトヤマコベニテングアブラムシの被害にあった。カブトヤマオオハナムグリとともに種の絶滅を共にしたとされるにもかかわらず、宿主のカブトヤマオオハナムグリとは異なり、未確認種であり続けるカブトヤマコベニテングアブラムシ（その紅い突起状の口が、「小さい」または「子どもの」紅天狗の鼻にたとえられたのであろうか）は、このコガネムシの四角い頭部にある口の周りを中心に、胸部や、そして腹の部分に至ると、足の付け根を中心にとりつき、ウジャウジャととりつき、その鋭いストロー状の口でコガネムシの体液を吸入しながら、あるものは走り、あるものは赤い斑点模様のようにじっとしている。宿主のカブトヤマオオハナムグリが攻撃されると、その紅い半透明の身体全体に生え揃う尖ったイボイボの微細な突起物から粘着性の「アブラ」を噴き出す。人の手の皮膚などに付着したこの粘着液を、すぐに水で洗い流さず、または、水で濡らしたティッシュペーパーやハンカチでよく拭き取らず、付着させたままにしておくと、皮膚が、痒くて、痒くて、堪えられず、これを掻きむしると、皮膚上にできた薄い赤い半透明の水疱が破れ、半端に凝固したイトミミズのような血が

の蔓植物群を、火で焼き、鉋で伐採しながら、元防空壕まで漸進する。後ろでは、蔓植物群が、嘲笑うようにその切断された蔓を、粘着性の強い薄緑、黄色、橙、青の液を各々たらしながら、風もないのにも関わらずブラブラさせ、互いに手当たり次第に結び合い、数分後には元々よりもさらに複雑に蔓同士が異種同種かまわずに絡まり合う。

蔓植物の中には、有毒の棘を持つものがあるらしく、その棘に触れた人肌はたちまち膨れ上がる。隣を歩く調査員の顔が蔓植物の青白い毒棘に触れるや否や顔は二倍に膨れ上がり、その調査員は、巨大な蠅や蜘蛛の幻覚を見始める。幻覚の夥しい数の蠅や蜘蛛は、彼の肌全部に潜り込み卵を産み始めたらしく、彼は、ものすごい勢いで自分の肌を掻き始め、彼は裸になり、ものすごい叫び声あげながら蔓植物群の奥に走り去り、もはやその姿を見ない。

私たちは、防空壕に辿り着いた。地面は苔類、茸類そして落葉に何層にも覆われ、土は全く見えない。上を見上げれば、絡まり合う樹木と蔓植物で空が見えない。その薄暗い中、それでも植物群の意図的隙間ともいえる隙間からは太陽光が細く、しかし強烈に射し込む。

ああ、青い色が、瞬間的にキラキラと視床を刺激する。その四角い頭部節を中心に体全体に盛り上がるように蠢きたかるカブトヤマコベニテングアブラムシの垂らす油により、さらに自らのフラクタル構造により、めまぐるしく虹色に輝くカブトヤマオオハナムグリである。一群は私たちの頭上を掠めるように飛んだ。パラパラとカブトヤマコベニテングアブラムシが落ちてきた。

慌てて本能的に手で払いのけると、プチっという音、ヌルリと厭な感触。痒い。

血がウニョウニョと踊る。

血がウニョウニョと叫ぶ。

動き回る。

暴れ出る。

ウィルスのダンス。

ウニョウニョと出て、皮膚を、その血が別の生命を持ったかのように気味悪く這いずり回るのであった。その動きは、どの物理的運動をもつても説明がつかない「動き」であり、生命的、少なくとも、ウィルスの「動き」であった。

甲山には、元防空壕がある。戦中に作られ、戦後、放棄された。私たちは、子どもの頃、ここを「基地」と称して、よく遊んだ。この元防空壕は、私たちが「基地」を卒業した後も、後輩の「私たち」に基地を提供していたのかどうかは定かではないが、昨今では、子どもたちにも放棄されて久しい。入り口には、数十種の棘のある蔓性植物がびこり、里山にあるにもかかわらず、人を寄せ付けない洞窟となっていた。この数十種の棘のある蔓性植物の周りを、見たこともない美しい虫が群れ飛んでいるという。自然愛好を目的とする非営利団体の一つがこの情報に興味を示し、調査に着手した。

私は、地元紙の地域版の記事でこの調査のことを知った。この「美しい虫」は、公式には絶滅したとされるあの懐かしいカブトヤマオオハナムグリではないか。

私は、すでに一身上の都合により、退職をした身、ボランティア調査員に応募すると、採用された。甲山は荒れていた。近頃では、里山はいずれもそうであるとは聞いてはいるが、この荒れ方は尋常ではない。得体の知れない蔓植物が木の枝からぶら下がり、地面に触れるや否や根を地中に潜り込ませ、潜り込ませながら反転、木の幹をグルグルと這い上り、梢近くまで這い上がるもの、枝に這い進むもの、それぞれ蔓が、獲物を狙うハナカマキリの一種かのように、ブラブラと垂れ下がる。これら蔓植物のうち数種は、ウツボカズラの種類などのようで、昆虫や、ある巨大なものになると、雀など小鳥やトカゲやネズミなど小動物をおびき寄せ、靱に落ちたこれら獲物を溶かして養分とするものも数十種類であろうか、生長している。これらのうち、最も攻撃的なものは、瞬時に飛ぶツバメをその蔓で絡み捕らえ、その靱に滑り込ませ、数十秒の間でツバメは溶かされ白骨化し、その骨が地上に吐き出される。私たち調査団は、こ

ウィルスに支配される。

暗黒。

としか呼びようがない蛾に。

続々と。

血は孵化する。

蛾の羽は。

暗黒そして空虚。

何もかも。

思念も。

光も。

ねじ曲げられる。

吸い込まれる。

蛾の空虚へ。

蛾は飛翔する。

太陽を消し去ろうと。

蛾は。

呆然とする私の隣で、免疫を持たぬどの調査員も痒くて痒くて発狂する痙攣する。脳が忽ちスポンジ状となる。もう立っていられない。ヨロヨロと座り込みながら舞踏する。すぐに骨がスポンジ状になつてしまふ。叫び舞踏しながら一瞬跳びあがり骨折する。口から泡を吹く。泡の中で蠢くもの、カブトヤマコベニテングアブラムシ、無数の油の放射、虹色の光を放ちながらグズグズと崩れゆく調査員たち。横で、後ろで、調査員たちが次々と虹色の光を放つ発狂するスポンジになる舞踏する崩れゆくゲル状に。

完全にゲル状と化した、調査員の溜まりに、カブトヤマオオハナムグリがとまり、その四角い頭部の先端にのぞく赤い舌で調査員の溜まりをペロペロ舐める。ゲル状の調査員の真ん中で、私だけ未だ人間のまま呆然と立ち尽くす。私に無数のカブトヤマオオハナムグリがとまる。カブトヤマコベニテングアブラムシがゾロゾロと私の皮膚を這い回る私は痒い暗黒を発射する青い光となる。

◆ 生が

川田あひる

エレベーターが
三階を通過するとき
ドアが透ける
さびしい死が
透ける

ラジオ体操している
このからだ
今日はひだり肩が
痛い
錆の
奥に

叫びをあげるまんたんの
しんしんとおんちようの
袋が
あり

とびあがつてみる
くびをまわす
死を

ふりはらい
よせる
波

引き潮の
浜辺に
司法解剖された骨が一つ
いや、むすう
端座している

わたしは
知っている
聞いている

よく生きられた事実と事情を
悔いはないと笑んだお顔と

六日

九日

核廃絶の署名に立ちつづけ
赤旗集金にまわられた
太い脚を

エレベーターが

三階を通過するとき

生が透ける

じゅうぜんの生が

透ける

泣かないで
おじょうさん

◆ 方途

富 哲世

夜半
ふと目覚めて
老婆はパジャマ姿にカーディガンを羽織り
クロックスもどきをつっかけて
表へ出た

一年前に十五で逝った
トイプードルのバニラの行方を探そうとして

路地は暗い街灯の向こう
やちまたの彼方に消え去り
バニラはもうどこにでも行けたので老婆は途方に暮れて
思い出も嘆きもなんだか色褪せてしまう
首縊りたくなるような今の
抛り所のない自由にひしひしと迫られながら
水の世界にいるような水銀灯の青い光をぼうつと浴びて
立ちつくしているばかりだった
読みさしの詩集を

広げて

わたしはベッドでゆうべの続きを読み始めたのだが

かつてはかけがえないほど無心に楽しめたはずのものが
いまはただ字面の宇宙を追っているだけで
そこに書かれていることの意味が
なんのことやらさっぱり分からなくなってしまうって
さかなのウロコを削ぐような日々ですから
ほんとうはまちがいなく
帰ってこようとして

キッチンでもなく

曲がると

妙に騒々しい

砂の

手鏡の

火の舟が、等々

(ことばの角を曲るとききみは悲しみを選ばなければならない)

遠く

サイレンに合わせて死が吼えるのを聴くと
老婆は今宵行きずりのおもかげに寄り添い
野良猫の仔らにエサを恵んでは
バニラのことを思う

キツネになって戻って来るね

声の数だけ死者のいる

濡れ簪の

この世界を思い浮かべ

沈黙の文字だけがひしめき合いながら

夢の領分へ届こうと

溢れて

◆紅茶とたとえばゴッホのような画家

◆羊水の海

月村香

高木富子

紅茶をポットで何杯もいれて中毒者のように飲むどうも本気で中毒になったようだ百℃にわかしたやかんのvapeur(蒸気)がいとおいしい緑の絵葉書を見ている少女は足元が冷蔵庫からもれてきた水で小川のようにぬれているのを気づかずに靴下で立っているわたしはもつと素敵な絵葉書がないかと探す寝室に行くくとデスクの引き出しからゴッホのものの絵の一枚を取り出すわたしはいつものまにかその絵を解釈し始める

わたしたちは 海を抱える
血、骨、涙・・その塩分濃度
原始地球の海水塩分濃度ほぼ1パーセントに同じ
海を引き連れ歳月を旅した
女は孕むと胎内に海を調える
ぬるぬる温かな羊水の海に漂つて
とろり妖しい夢も見たのだろうか
破水してしまつたわ 滴り流れ・
さあ、この世に生れ出る
今がその時よ
初孫

◆ツウカ

大橋愛由等

水位がぬめぬめ上昇して越水しそうなきおいは知らないはずはないのだがそれは魂が一気に産卵しはじめて海面が月に近づいたためであつて波止場のベンチに腰掛けたまま動こうとせず今晩港内に入ってくるかもしれないランチボートを待つていようとしているけど出入港するのはパイロット艇ばかりでしかもベンチのぼくたちの前では速度を落としているのが分かり二つ向こうのベンチに座つている夜気は見えないのか見逃しているか通過するばかりなのを妙に思つていと夜気はぼくたちも待つていることを気づきよたよた歩み寄り「キミタチハコレヲモツテイルノカ」と示した六折りの紙はなにも書かれていず「ニューシュッコウヨテイヒヨウナノダガ」とい「サクヤハ攘夷犬ガボクニキツイテ追イカケマワサレタ」と浪面をこしらえ伝えるにはランチボートが今晩入港するとしても向こうの波止場なのかもしれないということ独り言のように語りつつ「ソウイエバ」と夜気はぼくの顔をながめて言うには「82年前ダツタカキミノ祖父モコノ波止場ニイタナ」と言うのであるがぼくが見送るのは主義者ではないと言うと「キミハ舶来煙草ヲモツテイルノカ」と求められたが吸わないと言うと夜気は「祖父ハパイブダツタナ」と言い残して二つ向こうのベンチに戻つて引き続き海面を眺めている姿勢に戻つたのでぼくはトレンチ帽を被り直して今晩はランチボートは出航しないのだということが分かつて安堵したいのだがぼくたちが座つていたベンチの板の隙間から待つていこと知らずのうちにこぼれ落ちていったいくつかのコトバは何だったのか分からない不安にさいなまされていたのである

◆手を振って

上野 都

蒸し暑い夜
ドアを閉めて外に出る
外に出ても内側
人間の暮らしというものの
体の熱なればこそ

歩く
手を振って歩く
腕の付け根のネジを締め
飛びすぎないように
まないように

ドアの
ドアの
ドアの
それぞれの内側からこぼれ出す
手を振って歩く人に張り付いて
ぼんやりとほの白い光を放ち
夜道を照らし

の泡立つ花房

百日の嘘

百日の恭順

手を振っても届かない

あんな高いところで

好きでもない

嫌いでもない

ぬるい夜を掻き回す風に

暮らしを畳み込む花の百日

手を振って歩けば

こうして前へ進むことは有り難い

だが 向こう側には

百日足りない花も散って

手を振るほどに

じわりと流れ出す理不尽さ

数えたつもりが数えられ

汗にまみれ

嘘にまみれ

戻ってきて ただ熱いばかり

また一枚のドアにもなれずに

◆返信

中堂けいこ

線を引いた紙に文字を書く。えんえんと書く。ときおり分厚い綴じ束を開く。わたしは書き過ぎたり書き足りなかつたりするのだが、その加減がわからずますます書き募るのだった。部屋の片隅に置いた机に被さっている、昼日中の光が窓から差ししてくる。紙はずんずん増えて筆圧でこわついているが、紙の四隅がひどく気になる。文字の段揃えがいびつになつてもう少して何かはみ出しそうになっている。紙束の何枚かをきれいにたたみ、同じ材質の袋に平らに入れる。外側にまた文字を書く。外に出て坂道を下る。そこに赤いボックスがあつてそれはよく探さないとわからないところに口が切られていた。わたしは手に持っていた紙の包みをその口に入れる。今まきに入れようとする時、その口に紙束を落としこむばかりなのだが、ばね仕掛けの口の蓋を手の甲で押しながら、わたしにはその紙に書き込んだ文字が多すぎるのではないか、あるいは大切な文字が書かれなかつたのではないか、その過不足の具合がひどくいびつになり、口の中に入れた手の親指と人差し指がはなれず、真つ暗なボックスの中はひんやりとして底なしのようにおもえた。手で探った途端、紙包みはわたしの指を離れボックスの底に落ちていった。乾いた音がしてわたしは手を引いた。

坂をさがり帰ろうとしたら、後ろから何かかめかみを掠めた。よく見るとそれは紙飛行機だつた。丁寧にびつちりと折り込まれた白い紙飛行機だつた。斜めの光を浴びて影を際立たせ、幾つも幾つも紙飛行機が飛んで来る。わたしの後ろからわたしの向かう方へ。わたしの後頭部へ当るものもある。側溝のようなどころで紙飛行機がいくつか落ちていた。子供が補虫網を振っている。紙飛行機を取っているのだろうか。子供が頭を上げてこれはトンボだよ、と言つた。そうかトンボなのか。わたしはふり返らなかつた。

◆ 龜裂

高原に秋が来た
牛飼ひの鳶色の瞳の奥に
私は私自身の姿をまさぐる

私は使ひふるされた甕
みづうみに悔いを曳きながら
忘却へ漂ふ白鳥よ
空が流れ
落日が火刑の生贄に
柔順な羊たちをつらねた
記憶の破片を
危ふく繋ぎとめてゐるのも

寺岡良信

私に刻まれた
幾筋もの龜裂だ
高原に最期の秋が来たから
払曉には寂しい霧が
龜裂に滲みいるだらう
月光と
地層深く眠る泉の
未生のせせらぎ―
言葉を持たないものたちの
透明な意思だけに従つて
私は龜裂から壊れ
土に還る
銀河が甘い乳なら
それを汲みたいと願つた
牛飼ひも
明日は
ゐない

つれづれなるままに日暮しとなつてしまつたと思いつつ、夏の里帰りの記憶をトランク二杯分に詰めて詩人通りに戻つてきたのは8月の30日の金曜日だった。馬鹿らしいと思われながらもれないが、私は自他ともに認める晴れ女で、もちろん長期滞在すれば夕立くらいに遭うことはあるが、梅雨時の日本でも雪深い頃のコペンハーゲンでも「あの一週間はいい何だったのか、奇蹟的に晴れた」と言われるほどの晴れ女で、修学旅行や運動会を思い返してみても外れたことはまづない。今回の里帰り中も晴れというよりは猛暑の日々で、夏休みをしているという醍醐味が増すには増すが、こちらに戻るときは気温差ほどの季節であつても異常気象も重なつてか、ほぼ20度ほどになることが多い。帰宅するとバルコンの前にある無農薬ブルーンの木の実が紫色に色づいていた。旧い樹で、ミツバチも少なくなつたからか、この何年かは稔りも少ない感があつたが、今年は枝がたむむほど実をつけていて爽快である。

詩人通りは、既にいろいろな方に伝えたりブログに書いた

りしていることだが、ほんの数十年前には道路も住宅も整備されておらず、郊外の果樹園だつたという。もともとこの町に詩人通りという通りはなく Gertrud-von-Le-Fort-Straße という名の通りなので、私が人知れず詩人通りと呼んでいるに過ぎず、それを思い込みでタイトルに入れ固有名詞にしようとしているだけなのである。引つ越した当初は住民ですら綴りを訊き返し、17年経つた現在でもこの人物がいつたい誰なのか知らない人の方が多いと思う。Goethestr.や Eichendorffstr.なら瞭然なのかもしれないが、詩人であることは不確実だつた。

ゲルトルート・フォン・ル・フォール（1876―1971）は Fein Gertrud Auguste Lina Elisabeth Mathilde Petra von Le Fort という長い姓名を持つカトリック詩人作家だと引つ越してから後に判明するが、単に通りの名であつても、もしそれ以前に知つていたら、どことなく違和感、むしろ保守主義的敬虔さを覚えて窮屈にさえ感じていたのかも知れない。プロテスタントからカトリック教義に転向した信者の敬虔さというものを経験上いくつか知つているからであ

る。

ゲルトルートはフランスからプロイセンに移り住んだユグノー派貴族を先人に持つ。プロイセンの将校であつた父親、家族とともに北ドイツ、メクレンブルクの駐屯地を廻り幼年期を過ごす、14歳まで公立学校には行かず生家で個人授業を受けており、時には彼女の父から家の書庫をもとに個人教育を受けたともいう。現代のバイエルン州に住む一晴れ女としては、聞かずに厳格そのものと思われ想像するだに畏怖の念を持たざるを得ない。ゲルトルートはその後公立学校に生き、父の死後（1902）には数多くの旅行をする。その後の生活や仕事に決定的な契機を与えたのは、1907年のローマ滞在であると思われる。1908年からはハイデルベルグ大学やベルリンでプロテスタント神学、歴史、および哲学を勉強するのであるが、1922年からはミュンヘン近郊に移つて『環詩・教会讃歌』（1924）を発表した後、1926年にはローマでカトリック教会に転向するのである。

ユグノーというのは、ルターの宗教改革後カルヴァンの教

えに基づくプロテスタントたちがカトリック教会からそう呼ばれる蔑称であるが1685年ごろ、迫害により当時ドイツに逃れた宗教難民は五万人にのぼり、そのうち二万人がル・フォール家のようにプロイセンに移住した。自らも新教で寛容だつた選帝侯フリードリッヒ・ヴァイルヘルムに受け入れられたのである。ベルリン文化ではフランス語が行き交うが、ユグノーの人々は勤勉で経験豊かな農場経営者や生産者が多く、当時のプロイセンのみならず移住した先々の産業を活性化したことも知られる。そんな（先人を持つ）ゲルトルートがなぜカトリック教徒になつたのか。ゲルトルートは宗教哲学の研究で自らの宗派の所属を明確にすることを探求するうちに、「カトリック教会に惹かれていつた」と言われている。ただ、ゲルトルート自身、南に南に下っていることから、あの北ドイツの気候の厳格さというか暗鬱さがそうさせたのではないかと、ブルーンの実りを眺めて思うこともないではない。

（拙訳「故郷なき」は通常ユグヤ人につけられる形容語である。）

詩人通りより／8 詩人通りはゲルトルート通り 岩脇リーベル豊美

故郷なき者たち

ゲルトルート ル・フォール

我らは高貴なる家系に委ねられ
罪悪と婚姻せらる、
我らは暗い道を通り到来した
傷つき苦しみ苛まれて
我らはかつて祖国を包み暮らしていた―
神が我らをもぎ離した―
火と血をくぐり抜け前進した
追われ曝け出されて
深淵の天使が頭上を飛び越えゆき―
誰が天使の軍勢を追放するのか
我らは地獄のきわに移り住み―
もはや何ものにも恐れはない
あらゆる汚辱を通り抜け
裁きの場まで突破した
あなた方が決して口にしたことのない言葉を聞く―
ああ、静かに！

我らにこの地で故郷が手を振ることは二度とない
我らを結ぶ糸は放たれ
神は我らをもぎ離す、放浪の旅をゆけ、流浪の旅をゆく
荒れてあの国が横たわる

荒れてあの町が横たわる、荒れて庭も館も横たわる
手は空になり

我らは世界が瓦礫に陥るを見た―
もはや出遭うものはない

憎悪、嘲りの目的地よ

そこにはなにかがあるのか？
我らが神の故郷なき者たち―
神に我らは委ねられるのだ

罪の涙は涸れ、我らは脱出する

最後の痛みへと、
永遠なる恩恵が永遠なる泉を開く―
血が雪へと変わるとき

◆泥のしつぽ

高谷和幸

しつぽは単一の主語でなくてはならない。隘路の光を浴びてそれがそれと呼ばれる習わしでしつぽも泥が乾くように消えていくものですと、あなたは言いそう。身にぶらさがる股座でも白鳥の一枚の羽根ぐらいには重いのだし、9月の庭のわたしは三宮のショーウインドウのなかで黒いしつぽを見つけた。気付かずに、薄っぺらな意識の端っこを踏んだんだ。この頃のわたしの庭は重い。あなたが鏡になつてしまつてから半月になつた。ぬいぐるみの一部だろうか、死者がその開かれた墓に降りていくようにしつぽとあなたは鏡の中を旅をしたのだ。「こんな昼下がりの村だつた。」鏡の中の死者が二つに分かれて港へと影を落としていく。ショーウインドウのガラスの中でしつぽがぐるぐる回っていて、覗き込んだ幸福と死のあいだでは、鏡が右目の義眼をしばたかせる。そこから偽物の長い舌も。もう沢蟹の旨いところを齧るのもしつぽの役目になつてしまつたね。ここまでくれば壁の隙間からぐるぐるまわるものが、それが誰であるかは一目瞭然ということだろう。ここに「ある」んだよ、と記憶から「声」を汲んでみても、私は庭なんだから、しつぽを単一の主語で語れないのはしかたがないんだよ。「俺を食い命を食い」、イリスの口から黒い毛だけを見せて、チツ、チツ、チツ、ちつ、ちつ。柱時計みたいに振つてみる。

◆中秋の月夜

千田草介

風呂敷で包むのにちょうどよい月が山の端にあがつてきたものですから、元町の高架下でアラビアの航海士にもらつたマジックハンドでつかまえてやろうと思つたのです。古ぼけてはいますが、レバノン杉の香りが残つていて、その昔、魔術師シモンが使つたという、まことしやかな触れ込みの道具でしたから、どんなものでもたやすくつかまえられるはずでした。どういう来歴のものか大正五年の墨書きがある見台を供え物の台にして、胡麻団子をギザのピラミッド状につみあげ、パピルスはありませんからスキを立てて香を焚き、小拍子をパチパチと打つて獲物の気を引きます。はるか大昔の先祖たちの狩猟本能がよみがえり、アドレナリンの分泌が音を立ててきこえるようです。しかし獲物についての考察が足らなかつたのです。そもそもあれは円盤なのか球なのか。それをちゃんと見極めてかからないことには、うまくつかむことは出来ないのです。天体はたいいてい球状であるという科学に毒された俗説を頭から信じ込むようでは、きつと仕損じてしまいます。イスパニアの征服者につかまつて溶かされてしまいました。インカ帝国の神殿にあつた月は銀の円盤だつたというし、本朝においても盆のような月とうたわれてきたわけですし、もしかするとアポロが月へ行つたという夜にヴァチカンのバルコニーから望遠鏡でつぶさに月をながめたパウロ6世も月を円盤と信じ、目に見えたコペルニクス山を破門していたのかもしれないのです。球と円盤では、つかむコツがまったくちがうのに、どちらとも決めずに、えいやつ、とつかみかかつたものですから、すつてんころりんと見台ごと縁側からころげ落ちてしまいました。見あげると、月がらくだの絵を描いた箱からシガレットをくわえ出して、一服吹かしました。

ストリート（後背地）への思念―大橋愛由等詩について

高谷和幸

1995年以降のストリート（後背地）にある「ひとびと」は待機しているのかも知れない。ストリートを前にして、自分がなぜここにいるのか分からずにいるような、または、よりよってここにいることが自分でない駄目な自分からなっている、そのような状態が「過剰な棒立ち感」と言うらしい。つまり情報ばかりが過多となり世界とのつながりが掴めないでいる自分があり、つながりに過剰であるか希薄であるかの世界イメージしかそこにはない。その「ひとびと」は潜在的な希望として「歩く」イメージがあるのではないだろうか。実際には棒立ちしているのにかかわらず、記憶の「歩く」をくり返えそうとしているのではないだろうか。このことは、神野翼にインタビュした時に、「コーヒークップ（物体）はわたしを記憶しない。わたしはカップを持つ（手の重み）を記憶し、それを積み重ねるしかない」と語ったところに端を発している。私は喪失の喪失として「歩くイメージ」を作り出しているのかも知れない。

次に詩の文体にあるイメージを追ってみた。とりあげる大橋愛由等は詩誌「めらんじゅ」の同人である。彼は東灘区本山で被災した体験を持っている。あれから18年が過ぎたが、彼の書く詩のすべてが阪神淡路大震災のどこかに関わるものと言える。ここでは意味そのものではなく、文体の側面にあるイメージの部分を探ってみた。神野と同様に概念を含むイメージが生まれる場合、その生成のシステムの中に二重の意味があるという前提のもとのお話である。「タブローにタブローへ」の詩の冒頭部分から。

五つ目の最後の中着をあけてしまったから食卓の上にさんざんに置くと勝手に逸脱してしまいそうなので菓子箱の蓋をひっくり返してその中に並べてみるとひとつずつが対になっていることを知って敗者というのははくも寄り添

って生きているのかとしみじみ思い……

「タブローに、タブローへ」は句読点がない一本の長い文体の詩である。この冒頭部分を読むと、暗示するものから詩が始まっていることが分かる。「五つ目の最後の中着」についてこの詩は説明をしていないし、既成の事実として、あたりまえにあるものであるという設定になっている。その中着に、包み込むという同じ意味性を持つ「建築」のイメージを重ねると全体が市街図のような構造になっていることが分かる。その市街地図の「五つ目」は具体的な地区への指示性があるのだろうか。その地区の、敗者は死んだ者でも生き残った者でも「あるとない」の両義性のうえにあり、彼等は「寄り添って生きている」幻の町の俯瞰図が浮かんでくる。突き当たる「建築」の曲がったところに塀があり、囲いがある広場がある一本の道のようなものが詩の底辺に流れている風景で、予測、判断、感想をくり返す詩はその道（一本の長い文体）の上を風のように「歩む」をモチーフとしている。この詩の流動していく「歩む原動力」はどこにあるのだろうか。

ソイソース瓶を南南西から南南東の位置に変えたのはアルフォンソが故国を追放された直後に座っていた席よりミシエルがエビステーメーを論じた時に座っていた席の方向を選択しただけであって食卓の北端に置かれたカイエには朝餉にエチオピア産モカコーヒーを飲んだ日をかいがいしくも星印つきで記述していることやいつも決まってデイレートキーだけを踏んで横切る猫は世界は消去で始まるのだとぼくたちに示唆しているという二つの表象が横たわっている

私の知らない語（アルフォンソとミシエルは悪名高い人物と天使だろうか）が座る方向をソイソース瓶の方向に転移するという入れ替えがあり、簡単にまとめればカイエ（陳情書）に記述されたものは横切る猫で消去されるということが詩に書かれた意味ということになる。それぞれの語には掘り起こせば意味性とか歴史性があるにもかかわらず、例えるならば、わけありの男女の住む家と挨拶を交わす女学生が棲む家とが隣にあることあたりまえさ、等価性の住宅地図視線（イメージ）で捉えられていることだ。それらの横たわった「二つの表象」は、リアルさから逸脱した二重の意味になっているが、むしろ、方角に囚われた日常性の方が「後背地の空間」のイメージとして強いものだ。更地が出来て、そこに人が移り住むか、小さな空地のような広場になるか、一つの場所に囚われた方角、いわゆる吉本隆明の言う「都市空間の連結」作用がそこにある。それは力を加えて変形したものが自らの能力で復元するゴムの柔軟性とは明らかに違うものである。壊れたものをそれとして受けとり、新しく形を与えるひとびとの「連結」または「可塑性」の働きである。作者は食卓の上に幻の市街地図を走るぐねぐねとした道を描き出すことで、架空の「歩む」をくり返そうとしているのではないか。そのイメージの消去の消去が読者の抒情に訴えるものだ。詩の後半部分を載せる。

既知のことだけで今度は塩壺の中身をたしかめてみることにして情況の果ての海から採取したその塩はその海を挑発するように存在する岬に棲む詩人の悲しみをたつぷりと結晶化しているのだろうかひとつかみしながら憶いつつ

塩壺の横には切手を貼るだけになっている手紙が置かれていて投函しない躊躇は切手の選択ではなく書いた文字が熟成するのを待っているわけでも勝手にガリシア語に変異してしまうのを恐れているわけではなくこの食卓にあるものたちやここで生じたことどもを叙述してきたのかどうかという疑問と未送で封印したままでありながら封筒に返書が封入されていることを待っているからに違いないと再びソイソース瓶の位置を替えてみるのである

食卓の上の塩壺、それから横に置かれた切手を貼るだけになっている手紙がある。方角にこだわる作者にとつては、その配置はただ単なる光景ではない。この空間に文体は「歩く」イメージが具体的に書いてあるわけではないのに、「塩はその海を挑発」とか、「書いた文字が熟成するのを待っている」という連体修飾語の「連結」する働きによってストリートを「歩く」ようなスピード感を獲得している。しかしそれは「歩み」を虚構化していると言えはいいのかわ、フリードにならつて言うならば、食卓の空間に私を巻き込みつつ、「演劇性（シアトリカルティー）」に「歩み」を客体化していることになるだろう。また文体と私たちとの関係上に、歩むまでのせき止められて蓄積したエネルギーがあり、落差のあるそれが架空の「歩み」を作り出していると言える。棒立ちのひとびとの「歩み」がこの詩の向こうにあつて、そこからあふれ出るイメージが私たちに感じさせる「歩み」である。



近くの公園に咲いた彼岸花

夏の陽と陰のさなか 「一日一句」の日々

ためである。そして選んだ作者たちは私が所持している句集や、選句集を優先したので、友人・知人の作品も混じっている。五十人の作家の中には、今回はじめて集中的に読んだ人もいた。

この中で「メランジュ」同人で俳句もものする詩人の句

猛暑が続いた今夏。私が所属している二つの俳句雑誌（「吟遊」と「豈」）に俳句や評論めいたものを送稿するなど、どちらかという詩より俳句と接する時間の方が長かった。

ついでということではないのだが、夏の五十日間、「一日一句」と銘打って、毎日一句を取り上げて短い鑑賞文を付し、俳句・川柳に向き合うことにした。自分で決めたルールは、①五十日間、一日ずつ違った作家を取り上げる。②俳句・川柳を中心に取り上げるが、ジャンルにこだわらず選ぶ。③まずツイッターに文章をアップして表現の無駄をはぶき、そのちブログ「神戸まろうど通信」に転載して言い足りなかった箇所を補足する——といったものである。

この「一日一句」は、俳句や川柳に日頃なじみの少ない人を読者として指定していたので、難解句や、前衛作品は（残念ながら）対象外とした。このシリーズを読んで俳句・川柳に親しみをもちたいことを目的のひとつとし

を九月一八日付けで紹介したので、「一日一句」の文章そのものを引用することにしよう。

2013夏うたウタ48／夏果ててリラ座の浜に棄てる
權／寺岡良信／詩人が産み出す佳句。美しい作品世界。星座である「リラ座」の浜とはどんな場所だろう。言葉の響きがロマンティック。そこに船を漕ぐ權を棄てるという。それは今と違う場所に向かうのを放棄することであり、生そのものの断念でもある。

この句はもとも九月に行われた「北の句会」に出句された作品で、寺岡氏の句は詩とほぼ同期する作品世界を持っているために、類想句が多い俳句の世界にあっては珍しく作家を強く推定できる立ち位置にある。

自らは俳句作家ではないと謙遜する寺岡氏だが、俳句の腕前は卓越していて、俳句作品としても骨格もしつかりしていることもあるために、句会で高得点を得ることが多い。

かたや、といった切り返して自分の俳句を語るには、少々敗北主義的であり、句境の浅さを棚上げての発言なのだが、どうも私の作る俳句は、好事家的な人から選句される場合が多く、句会でそうした傾向の俳人が出席しなければ、点が入ることは少なく、ひたすらベンチウオーマーに徹することになる。

こうした経験が重なったので、「私の俳句は句会向けではない」と思いなすようになり、ここ数年は「ひきこもり俳人」状態となり、俳誌への投稿を表現の中心にしている（そういういつつ、七月には「吟遊神戸カルメ句会」の事務局を担当して句会を仕切った。この会は世界各地から多言語HAIKUが寄せられるというスリリングな体験が出来たので、「ひきこもり俳人」である私にも大いなる刺激となった）

神ながら海坂歩く寡婦候補
遠雷に志野よりにじむ憂と鬱
叛旗を僕をアガペーを避ける風
月光の奴婢になりたく月衣着る
金床に嬰兒の頭乗せ秋を待つ

愛由等

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.85
めらんじゅ

2013年09月22日 通巻85号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人／大橋愛由等（『Mélange』同人）
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）